サーチライト **With Pastor Jon**　創世記 **2** 章　パート **1**

……

このメッセージはアップルゲート クリスチャン フェローシップの、ジョン・コーソン牧師が公開したメッセージを、アメリカ在住の日本人クリスチャン木下言波が翻訳して YOUTUBE やブログに上げたものを文字化したものです。世界的なインターネット規制が始まろうとしています。私達はその日のために、文字にして紙に記録する必要を感じました。また、インターネットに不慣れな方や字幕を追って読むのが困難な方のためにも必要があると主に迫られたと感じます。
※インターネットのメッセージを、文章化するこの働きを始めた姉妹が、現在目を患って治療中です。どうか、りょくさんの為にも、お祈りください。

---

*「きょう、もし御声を聞くならば、あなたがたの心をかたくなにしてはならない。」ヘブル **4：7***

メッセージ by ジョン・コーソン牧師 アップルゲート クリスチャン フェローシップ
http://joncourson.com/
7590 Highway 238　Jacksonville, OR 97530
訳 by 木下言波　DivineUS：https://www.youtube.com/user/TheDivineUs
筆記 by Rumi

創世記 1 章と 2 章は共に創造の物語ですが、それで、ある人々には矛盾している、または問題があると見えるようです。
ご覧の通り、1 章で人は 6 日目に造られました。なのに、2 章でまた人が造られている。
これが、ある人々には問題に見えるようですが、そうではありません。
1 章では、創造物語を大きな視点から見ています。大きな絵です。
2 章は焦点を絞って、カメラがズームインして近づき、人の創造について、個人を具体的に書いているのです。
1 章は広い視野で、2 章は既に 1 章で触れられた人の創造について、焦点を絞り、更に詳細を書いています。
したがって、1 章と 2 章はそれぞれ別の創造物語ではありません。
2 章はより具体的にもっと深く、神がどのように人を形造り、どのようにして女を与え、エデンの園での結婚、エデンの園で二人を一つにしたのかということを記しています。
前回は 2 章 4 節まで行きましたね。
私たちは創世記を全速力で、みことばを大急ぎで見ています。

さて、ここの天と地は、神がそれらを創造した日に造られた、初代の天と地です。
ここで、天が複数形（The Heavens）になっていることに注意して下さい。

ある人たちは、これが創世記 1 章に書いてあることと矛盾すると指摘します。
初めに、神が天と地を創造された。（創世記 1:1）
In the beginning God created the heaven and the earth.
ところがヘブル語の聖書でも、創世記 1:1 は、“天”は複数形で“Heavens”と書かれているのです。
神が造った天について読んだり書いたりする時、聖書の中での天は 3 段階、または 3 次元であることを忘れてはなりません。
第 1 の天は、例えばダニエル書 4 章にある通り、鳥が飛ぶところ、雁が舞い、鴨が行くところ。空間と言ってもいいでしょう。私たちの真上にある空。それが第 1 の天です。
第 2 の天は、星が存在するところ。
天は神の栄光を語り告げ（詩篇 19:1）
詩篇 19 篇は、歴史が始まった大昔からずっと、星たちのメッセージは全地に響き渡り、その言葉は地の果てにまで届いた、と続けています。
ということで、第 1 の天は私たちの頭上に広がる空、空間。
第 2 の天は星が存在するところ。
そして第 3 の天。
パウロが第 3 の天に引き上げられたことを覚えていますか？
パウロはその中で、「第 3 の天で何かを見た」と書いています。
「それは、あまりに素晴らし過ぎて表現できない。私が見た事、聞いた事を書き記すことはできない。肉体のままであったか、肉体を離れてであったかは知らないが、私は第 3 の天まで引き上げられた。」（Ⅱコリント 12:2 - 4）
第 3 の天というのは、私たち信じる者が待ち望んでいる場所、私たちクリスチャンが最後に行くところです。天国。私たちは天国に行くのです。
このように、天には 3 段階があります。
第 1 の天は鳥たちが舞う空間（ダニエル書 4 章）
第 2 の天は星たちが存在するところ（詩篇 19 篇）
第 3 の天はパウロが引き上げられた場所、間もなく私たちが行くところです。
というのも、私は、主が私たちを引き上げに来る日がいつでも起こり得る、と思っているからです。その日が待ち遠しい。
神は複数の 3 つの天と、そして地を創造しました。

地には、まだ一本の野の灌木もなく、まだ一本の野の草も芽を出していなかった。
それは、神である主が地上に雨を降らせず、土地を耕す人もいなかったからである。
（創世記 2:5）
ただ、霧が地から立ち上り、土地の全面を潤していた。（創世記 2:6）
神が 3 つの天とそして地を創造した時、1 章で書いてありましたが、当初は雨が降っていなかったことがこの 2 章でも分かります。
その代わりに、霧が地から立ち上っていました。
神はスプリンクラーを設置してくれたのですね。自動タイマー付きで。

全ての物に水が与えられましたが、地上に雨は降りませんでした。ノアの日まで。
以前、確信を持ってお話したように、地球は水の幕で覆われていて、全世界は熱帯気候に保たれていました。
そのため人間は紫外線から守られ、老化することもなく、長生きすることができました。
しかし、創世記 1 章で学んだように、その水の幕はノアの時代に崩壊し、世界を洗い流してしまった。
つまり、ノアの時代までは雨は降らなかったということです。
では、植物が、緑豊かに生い茂っていくための水分をどうやって補給したかというと、霧が地から立ち上っていたのです。
神が自動散水装置をセットしていて、全ての植物を青々と茂らせ育てました。

その後、神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。（創世記 2:7）
いのちの息…
そこで、人は、生きものとなった。（創世記 2:7）
すごいシーンですね。天国へ行ったらこのシーンをビデオで観てみたい。
ここに神が在る。
神は、地の“ちり”を集め始め、その“ちり”で人を形造りました。
それで体はできました。
しかしまだ、いのちはありません。
神が人の鼻に息を吹き込んで、ようやく人は生きものになりました。
ヘブル語で“息”という言葉は“風”“霊”という言葉と同じ単語で“ルーアッハ”（Ruwach）
新約聖書で使われているギリシャ語でも“息”“風”“霊”は同じ単語で“プニューマ”（Pneuma）
面白いですね。息、いのち、霊。
人がいる。けれども人は生きものではなかった。神が息を吹き込むまでは…
それがなされた時、人は真の実体となる。
体が形造られた時点ではなく、神がいのちの息を吹き込んだ瞬間に、人は生きている魂、人間になるのです。非常に興味深い。
人はちりから造られ、事実、アダムという名前は“ちり”という意味を含んでいます。
アダムは“人”と訳すこともできますが、語源をたどれば“ちり”で、文字通り訳すと“ちり”がその人の名前。
土地から生じたアダムという名前は“人”を意味し、その語源は“ちりから造られた者”
詩篇 103 篇にこう書かれています。
父がその子をあわれむように、主は、ご自分を恐れる者をあわれまれる。（詩篇 103:13）
主は、私たちの成り立ちを知り、私たちがちりにすぎないことを心に留めておられる。（詩篇 103:14）
いいですね～
神は、私が何で造られたかを知っています。ちり！
あなたは自分が汚れていると感じたことはないですか？

土臭いと思ったことはないですか？
あなたや私のような人間は、「私がちりから造られただって!? そんなワケない。」と思いがちです。「私はもっとちゃんとしている。」「汚くもないし、土臭くもない。」
しかし、神は詩篇 103 篇で言っています。
私たちがちりにすぎないことを心に留めておられる。（詩篇 103:14）　「土臭い」と。
事実、パウロはⅡコリント 4 章で言いました。
私たちは、この宝を、土の器の中に入れているのです。（Ⅱコリント 4:7）
土臭い器とでも言いましょうか。

問題は、私たちの多くが「イエス・キリストの宝が私の中に？」
「それなら、私の器は土臭くなんかないし、土で出来た物でもないし、埃っぽくもない。
自分の器を磨き上げて、色を塗って、煌びやかにしよう。ブランド品にしよう。」
などなど、自分の器を飾り立てて、煌びやかなものにしようとすることです。
けれども、です。神はこう言いました。
「わたしは、わたしの宝、わたしの息子イエスを、土臭い器の中に入れることを選んだ」
なぜでしょうか？
レンブラントやダヴィンチなどの貴重な名作が展示してある美術館、どんなものであれ、非常に高価で貴重な芸術の宝が置かれている所に行った時、それらがキラキラ輝いているネオン付きの額に入れられているのを見た事はないでしょう？
名作のお宝が、金や宝石で煌びやかに飾られた額に入れられているのを見ることは、絶対にありません。
なぜなら、それは名作の価値を下げてしまうから。
額はシンプルで、自己主張しない物が良いのです。
全ての注目が、名作そのものに注がれるように。
そこで、御父は何をしましたか？
「全ての注目が注がれるように、そのために、わたしの宝を土の器の中に入れよう。」
しかし、私たちは言います。
「器をピカピカに磨こう。そうして、それと一つになろう。」
それで現実は、私たちが信仰心でやっている全てのことが、名作や宝から注目を逸らさせ、塗り飾られた器に注目を集めさせてしまっているのです。
器である人そのものに。
こうして人々は器（人）に目を留め、その人物について語り、その人物を重視します。
主は言いました。
「それは、わたしの思いではない。わたしの意図は、宝を土の器に入れることだ。」
宝とは…お気付きの通り、器ではありません。

「ジョン、何が言いたいの？」
聖書研究者として、牧師として、長年神と共に歩いて来た者として個人的に確信しているのは、主は、

私たちが思うほどには、私たちの中から出て来るものを期待していない、ということです。
「自分の器に色を塗らなければ！」と私たちは思います。
でも主は「色付けする!? 止めなさい。そんなことをするな。何をやってるんだ!? 」
「わたしは、あなたが何で出来ていて、どこから来たのかを知っている。その上で、わたしの宝を土の器に入れることを選んだのだ。」
事実、旧約聖書の中で、神は何度も何度も言っています。
自然のままの石で、あなたの神、主の祭壇を築かなければならない。（申命記 27:6）
鉄の道具を当ててはならない。（申命記 27:5）
「石を飾り立てようとするな。人間は、石に手を加えようとすると、祭壇の献げ物ではなく、石に皆の意識が向くからだ。」
これは、教会生活にも、信仰的にも非常に危険なことです。
煌びやかな美しいもの、黄金の祭壇、磨き上げられた器。
神の宝、子羊の犠牲から注目を逸らすもの。
人間によって飾られ、磨き上げられたものに引き寄せられていく。

「それで、何を言いたいのか？」
「肩の力を抜きなさい」と言っているのです。
神は、私たちが土で成り立っていることを知っていて、私たちをちりで形造ったことを覚えており、そして、私たちが土臭い者であることを理解しています。
では、私たちは、自分の土臭い器と宝物をどうすれば良いのでしょうか？
お答えしましょう。
主は、私たちが自分の器を飾ることを望んでいません。
磨き上げることも、ブランド品にすることも。
主は、私たちがどうあるべきか、どうすれば私たちの中から宝が溢れ出るかを、この物語を通して語りました。
士師記 7 章。
ギデオンは 300 人の兵士で、数えきれないほどのミデヤン人と戦いました。
谷には膨大な数のミデヤン人がいるのに、ギデオンには 300 人の兵士だけ。
この話は知っていますよね。
でも主は「それで十分だ。」と言ったのです。
「ギデオン、この 300 人各々にラッパ（角笛ですね）と、土の空の壺と、火の点いたたいまつを持たせなさい。」
それで、ギデオンは兵士たちに命じて、火の点いたたいまつを土の空壺の中に入れさせます。そして、無数のミデヤン人が陣を張っている谷を囲んでいる山の周囲に広がり、角笛を吹き鳴らして合図をしました。角笛を吹き、「主のためだ！ ギデオンのためだ！」と全員に叫ばせ、持っていた土の器を打ち砕かせました。
土の器が砕けると、中にあるたいまつの光が放たれます。
ギデオンはその夜、主から言われた通りにミデヤン人の陣営を取り囲みました。

それから、角笛が吹き鳴らされ、土の器が砕かれ、たいまつの光が放たれた。
すると、器が割れる音を聞き、放たれた光を見、角笛の音を聞いたミデヤン人は皆、走り出し逃げ回りました。
彼らが何を思っていたか分かりますか？
一つ一つのラッパ（角笛）の音が、ものすごい人数、大群のようで、実際はたった一人だったにもかかわらず、ミデヤン人は非常に恐れ、剣を取り、まだ寝ぼけているような中で戦い始め、同士討ち、仲間同士、互いをズタズタにめった斬りにしました。
こうしてミデヤン人は一掃され、ギデオンたちは大勝利を収め、神が栄光を得たのです。
ここで、私たちが忘れてはならない鍵は、光が放たれると、敵は撃退され、一掃されてしまうということ。
それは、土の器が美しく飾られた時ではなく、打ち砕かれた時に起こります。
言い換えると、主は、あなたや私がひび割れた器であることを望まれる。
「ジョン、どういう意味？」
不完全でいいのです。
「オレって、イケてる！」というよりも、むしろ、あっちやこっちが欠けたり壊れている方がいい。
そこから出て来るのは光、宝。
イエスが光。器が砕かれた時、光なるイエスが放たれる。
困難に直面している時、試練の中にいる時、そういう時に、あなたから溢れ出ている光が見えるのです。見た事があるでしょ!?
ある人が苦しみ、困難の期間を通って打ち砕かれているのを見て、あなたは言うでしょう。「主の光が、あなたの中から射してくるのが見える。」
あなたが磨かれ飾られた器の時ではなく、砕かれた時に、ひび割れた時に。
土の器のままでいい。
神は言います。
「わたしは、あなたが何で出来ているのか知っている。あなたが土臭いことも、ちりに過ぎないことも。」
「あなたは土の器。わたしは、わたしの息子を入れるためにあなたを選んだ。」
「わたしの息子は光。土の器の中に在って、器がひび割れた時、壊れた時に、その光は内側から放たれる。」
「それが、敵であるミデヤン人を打ち負かし、あなたに勝利をもたらすのだ。」

さて、神はアダムを造った後、園を設けました。
神である主は、東の方エデンに園を設け、そこに主の形造った人を置かれた。
（創世記 **2:8**）
神である主は、その土地から、見るからに好ましく食べるのに良いすべての木を生えさせた。園の中央には、いのちの木、それから善悪の知識の木とを生えさせた。（創世記 **2:9**）
一つの川が、この園を潤すため、エデンから出ており、そこから分かれて、四つの源となっていた。
（創世記 **2:10**）

第一のものの名はピションで、それはハビラの全土を巡って流れ、そこには金があった。（創世記 2:11）
その地の金は、良質で、また、そこには、ブドラフとしまめのうもある。（創世記 2:12）
第二の川の名はギホンで、クシュの全土を巡って流れる。（創世記 2:13）
第三の川の名はヒデケル（ティグリス）で、それはアシュルの東を流れる。
第四の川、それはユーフラテスである。（創世記 2:14）
ほとんどの人が聞いたことがありますね？
大抵の人がティグリス・ユーフラテス川を知っているでしょう。
これらがどこを流れているのか、私たちも知っていますが、他の 2 つの川については、具体的にどこにあるのか分かりません。
しかし、この 4 つの川が、エデンと呼ばれる園の境界線になっていたことは明らかです。
“エデン”とは“大きな喜び”という意味。
そこは、喜びに満ちた所でした。
神である主は、人を取り、エデンの園に置き、そこを耕せ、またそこを守らせた。
（創世記 2:15）
つづく

いと高くあがめられ、永遠の住まいに住み、その名が聖である方が、こう仰せられる。
「わたしは、高く聖なる所に住み、砕かれた人、へりくだった人とともに住む。
へりくだった人たちの霊を生かし、砕かれた人たちの心を生かすためである。
わたしは、永遠に争うことはなく、いつまでも怒ってはいない。
わたしから出た霊が衰え果てるからだ。わたしが造ったいのちの息が。」
（イザヤ書 57:15－16 新改訳 2017）